関係性としての子ども
—親役割の視点から—

岩　川　幸　治

1．はじめに

アリエス（1960＝1980）は，服装・遊びなどにおいて大人と子どもとが区別されるようになった事例を挙げ，近代になって子どもが意識化され，「子ども」という存在が発見されたことを証明した。さらに，子どもは単独で関心を向けられる対象として家族意識の中に取り込まれることによって，明確に「子ども－大人」という関係が構築されることとなる。このように，子どもは客観的に存在するものではなく，「子ども－大人」という関係において主観的に意味が与えられるものとなった。同様に児童文学においても子どもの発見が指摘される。児童文学の中で描かれた児童が，大人によって考えられた児童であって「真の子ども」ではないという児童文学者の批判に対し，児童は内的な転倒によって見出されたに過ぎず，「真の子ども」「現実の子ども」もその後付けに過ぎないと柄谷（1980）は指摘する。

子どもの発見は，子どもの存在がわれわれの意識レベルに顕在化するようになったことを意味する。意識レベルでの子どもの位置づけは，子どもに対する様々な解釈が加えられ，いわば主観的な意味づけのもと，「子ども」が私たちの前に実体として登場したといえるだろう。そこで本稿では，自明視され当たり前のものとされる「子ども」を，大人との関係を考えることによって相対的に位置づけ，「子ども」を浮かび上がらせるための手がかりを提示することを目的とする。

2．子どもを捉えるための視座

(1) 子どもの発見の意味

子どもを相対化するためには，まず「子ども」をどのような視点に立って捉えるのかが問題となってくる。そこで，子どもの発見が何を意味するのかを考えてみたい。

子どもが発見されたことによって，子どもとはどのような存在としてみられるようになったのであろうか。子どもの発見の意味として，①発達の可能態としての子どもの発見，②大人や大人文化に対する挑発者，侵犯者としての子どもの発見という二つの意味がある（北本　1988）。①の場合は，大人と子どものあいだのある種の段差や異質性を前提として，教育による文化伝達と個人の無限の可能性を意味し，②の場合は，子どもの純真性・無垢性などの，硬直性や閉鎖性を帯びてしま

っている大人の行動や価値観を揺さぶり，人間の存在の仕方の根源的な自然性に向けての告発と捉えられる（北本　1988）。

子どもが発見されたことは，焦点の当て方によって浮かび上がってくる「子ども」像が幾重にもなりうることを意味する。そこで，本稿における子どもを捉える視座について明確にするために，子ども研究の方法を今一度整理しておきたい。

山村・北澤（1992）は，子どもへの関心のあり方に中心をおいて，子ども研究の方法を次の３つに分類する。実証科学としての心理学や歴史学における事実としての子ども研究，あるべき子ども像や子どもとの関わり方を追求する理念としての子ども研究，単に子どもを問題にするだけでなく，子どもを通して何かを見ようとする方法としての子ども研究[1]，以上のように分類する。

これらの子ども研究の３つの方法が個々に独立したものとして存在するのではなく，どの部分に焦点を当てて子どもに対するアプローチをしていくのかを問題として考える必要がある。そこで，先程の子どもの発見の意味（北本　1988）を子ども研究の方法に対応させてみると，発達可能態としての子どもの発見は事実としての子ども研究と理念としての子ども研究に，大人や大人文化に対する挑発者，侵犯者としての子どもの発見は方法としての子ども研究にそれぞれ対応する。

本稿では，方法としての子ども研究を手がかりにして話を進めていきたい。方法としての子ども研究に注目するのは次の理由による。子どもを単に発達途上の存在だと理解することは，子どもが物事を理解する仕方からかけ離れてしまう可能性が高いのではないかと考えられるので，子どもの行動を子どもが理解する仕方により近づきたいと考えたためである。子どもにとっての行動や物事の理解の仕方は，将来を見据えて行われているというよりも今現在におけるものであろう。だからこそ将来的な可能性を前提として子どもを眺めるのではなく，子どもにとって感じられる今（現在）を問題の中心に据え「子ども」を見ていきたい。その上で，「子ども」を相対化する作業を試みる。ただし，子どもを将来的な可能態として捉えること自体を否定しているのではない。あくまでも「挑発者」の視点を獲得し子どもに迫るために，方法として子ども研究という方法を参考にしたいのである。

方法としての子ども研究について小浜（1987）は次のように唱える。①身のまわりにいる子どもを観察対象として，成年者と比較するという科学的・実証的方法，②社会的文脈における子ども概念を調べ，社会的な規定条件によって子どものイメージを作るという歴史的・記号論的方法（本田和子　1980，1982など），③過去の子ども経験と現在の大人としての振るまいのあいだにある落差の有無・程度を追及し，子どものイメージを組み立てるという内観的・文学的方法（村瀬　1984など）があり，これらの３つの方法をすべて含みつつ，総合的な角度から子どもに光をあてることだと指摘する。しかし，実際に研究をするに当たって，これら３つの方法すべてに焦点を当てることは難しいので，論者の関心によっていずれかの方法が無意識のうちに前提とされてしまう，その点には注意を要する（小浜　1987）のではあるが，話を進める際に，いずれかの方法に基づいて話を進めなければならない。そこで本稿では，方法としての子ども研究の先駆けである本田の子ども論を手がかりにして，「子ども」を捉える視座について考えてみたい。

(2)「異文化」としての子ども～本田和子の議論から～

本田は大人自身が挑発者としての眼差しを得るために，また子どもを相対化するために，子どもを「異文化」として捉え，子どもの他者性を浮かび上がらせる（本田　1980，1982，1989）。この背景には，これまでの「子ども研究」の中心であった，心理学・教育学・医学の3本柱による科学的客観性から脱却するという目的があった。科学的客観性から脱却し，主観を復権させることで「子ども」に迫りたいという理由から，「異文化」という視点を導入したのである。では，子どもを相対化する上で「異文化」という視点の有効性とは何であるといえるのか。このことを考えるにあたって，まず，本田の「異文化として子ども」の議論を整理したい。

子ども研究の中心を担っている科学的客観性に基づいた枠組みにおいて，子どもが語られるとき，子どもの異和性に捧げられたしるしとして「発達」「適応」という概念が用いられる。「発達」とは，一定の成熟に到達して安定期に入った「大人」に対して，不断に変化し続ける「子ども」に付与されたものである。この「発達」に価値が負荷され，大人中心の秩序社会への予備軍として子どもを位置づけるような「教育」「保護」が「子ども研究」の中心となる。このような「子ども研究」の方法において，子どもにとっての「現在」なるものを問題とすることは難しい。そこで，科学的客観性に基づいた子ども研究の「中心」から脱却するために，「非中心化」の企てを試みる。つまり，子どもの異和性を「発達」としてではなく「異文化」としるしづけることで，「成人化」「秩序適応」という一元的価値体系から脱皮して，多元的な価値を模索することを企てる（本田　1989：235－239）のである。

そのためにまず，「無垢」「白紙」，あるいは「可能性」「発達」，さらには「異星人」などの絶え間なく送り出され続ける「子ども」が，「語られた（フィクションとしての）子ども」であることを確認する（本田　1989）。このことによって，「語られた（フィクションとしての）子ども」という位相で「子ども」が把握される力を失ってしまうので，「語られた子ども」が生身の実態そのものと一体化されうるという錯覚に陥る危険性を問題視することができるのである。

次に「語られた（フィクションとしての）子ども」を相対化するために，大人と子どもとを切り離して考えるという作業を行う。大人＝秩序世界を生きるものと捉え[2]，「大人」に固有の文化が形成されるのであれば，「子ども」にも同様に固有の文化が形成されるのではないかと考え，子どもの生の現象を「子どもの世界」という形で独立させることで，「大人」との差異を際立たせ，子どもの「他者性」「異文化性」を浮かび上がらせようとする[3]（本田　1980，1982）。

さらに語りにおいて子どもが浮上する時，「ことば」による固定化が施されてしまうので，その限界を超えるために「語り」の網の目からこぼれ落ちるような，身体性・感受性に注目し「子どもの世界」を読み解くことを試みる。具体的に，最も子どもの世界が「見えるもの」すなわち子どもの体によって表現される「動き（動詞）」に焦点を当てたり（本田　1980），「感じられるもの」を手がかりとして，「マージナルな領野」における子どものありようを探るために「体性感覚的擬態語」を用いて「子どもの世界」を読み解く（本田　1982）。

「動き（動詞）」に焦点を当てたものは，「ねる・とぶ・めぐる・ほる・たべる・うつす」という6項目に子どもの生の様態を分類し，保育園・幼稚園・家庭での事例を引用しながら，「子どもの世

界」の固有性を明らかにする。「うつす」という行為は，子どもたちが身近な人々のありようを，自身の体にうつしかえる鏡の機能をもつものである。「鏡にうつす」という行為は，その行為を通じて自身の身体を視覚像として把握するものだと説明される。

「体性感覚的擬態語」を用いて子どもの世界を読み解いたものとして，子どもが泥で遊ぶという事例では次のような説明がされる（本田　1982：26－49)。「砂」と「水」という全く異質な物質をこねることによって新たな「泥」が作り出される。「どろどろ，べとべと」とした「可塑性，流動性」という特徴をもつ泥は，「可塑性」のゆえに子どもを創造へと導くが，一方でその「可塑性」は「無形態＝分類不能＝混沌」でもあるので，秩序世界に対する侵犯性をもちかねない。ゆえに，大人たちに代弁される秩序世界は，泥遊びを評価しつつ排除するというアンビバレンスに陥り，「泥んこ公園」にみられるような制限つきでの保障となる。

このように，身体性・感受性に注目することによって，「文化の外なる存在」として子どもの特性を捉えることができ，子どもが常に反秩序的であることをみつめ直し，秩序社会に対する問いかけをすることができる。また，秩序への適応を前提とした規範としての「科学的発達観」のフィルターから「子ども」が解放され，「子ども」の「他者性」「異文化性」が浮かび上がり，単なる「発達途上態」としてではない，子どもの意味の問い直しが可能なのである。このことによって，大人が挑発者としての眼差しをもつことができるのであり，本田が目的とする，「子ども」を細切れにされた範疇としてではなく全体として受け止めることができることになる。

(3) 関係性としての子ども

科学的客観性による「子ども」把握に重点を置くのではなく，主観を復権させ子どもの感性に近づく「異文化」という視点を示したという点に本田の意義はある。本田による子どもの「異文化」視は，研究者という大人の立場からの子どもの把握である。アリエスによる子どもの発見に今一度立ち返ってみると，「子ども－大人」の関係性が浮き彫りになり，子どもが大人によって意味づけられるものであることが明らかにされた。子どもが大人との関係によって位置づけられるものであるならば，子どもを様々な連関において把握する必要がある。そうすると，子どもを大人との関係に位置づける時に想定される大人が問題となってくる。この問題に注目する時，まず子どもとの関係を築く大人について整理をし，そして研究者という大人以外の大人によって位置づけられる子どもについて検討することが必要となる。

そのためには，まず本田による研究者という大人の立場から子どもを捉えることの問題について考えなければならない。本田による子どもの異文化視は，中心と周縁という概念に依拠している。中心と周縁という概念を援用すると，大人＝中心，子ども＝周縁と定義され，この定義から子どもの周縁性が明らかになり，子どもは異文化的・他者的な存在となるのである。中心と周縁という概念を提示した山口（1975，1977）によれば，中心は秩序・体系的なもの，好ましいもの，周縁は非秩序，体系から外れるようなもの，好ましくないものと定義される。周縁である非秩序を説明するものとして，忌避される汚い，気味悪い，曖昧である，ぬめぬめしているといった，口にするのがはばかられるものが挙げられる。ただ，ここでは，中心と周縁がそれぞれどのようにして規定され

るのかということが明らかになっていない。

本田は「子ども」の周縁性（非秩序）を明らかにするために，前節で整理したように泥を取り上げ，研究者という大人の立場から「子ども」を周縁として定義した。中心と周縁が大人によって規定されるのであれば，子どもと対の関係をなす大人の具象性をあげる必要性が生じ，研究者ではない子どもを規定する身近な大人の存在を考慮しなければならない。子どもにとっての身近な大人，その最たるものの一つとして親を挙げることができる。実際に親との関係を築くことによって子どもが存在する以上，具体的な大人との関係に「子ども」を位置づけるという作業が必要となってくる。この作業をすることによって，「大人－子ども」という枠組みにおける大人と子どもを，具象度の増した関係性へと引き上げることができ，子どもの他者性や異文化性の位置づけを明らかにすると同時に，子どもの規定を明らかにすることが可能となる。

ただ，子どもの他者性・異文化性に関して言えば，次のことを問題として指摘することができる。本田によれば，子どもの他者性とは自然的なもの（遊び）に限定されており，その中でしか子どもを他者的な存在として捉えることはできないことになる。果たして，自然遊びに代表される形での子どもの他者性の把握には問題はないのであろうか。実際に子どもが自然遊びのみならず，様々な遊びをしていることから考えると，多様な遊びの中で子どもがいかに他者的な存在として了解されるのかを見る必要がある。また，子どもの泥遊びに対する大人の介入は，秩序世界が侵犯されることの有無に起因すると考えられているが，果たしてその点に重点をおいて大人による泥遊びへの介入は行われるのであろうか。この問題設定の背後には，子どもの非秩序性を，客観的科学性を批判することで泥遊びなどの自然的なものと位置づけ，固定化された周縁として定義したことがあるといえるだろう。つまり周縁として子どもを固定化することで，その周縁に当てはまるように子どもを囲い込んでしまうことになるのである。

このような問題が生じたのは，子どもが関係を生きているという視点が抜けているからではないかと思われる。だからこそ，子どもの他者性が身近な関係をそぎ落とした研究者としての視点によってしか把握されていないので，日常とは離れてしまったものとなる可能性が生じるのではないだろうか。

子どもを異文化として捉えるのであれば，子どもと対の関係として位置づけられる大人は，どのように子どもを異文化と捉えているのか，またその中で，子どもの異文化性はいかに布置され，他者性は理解されるのかといった，大人自身の文化の中での子どもの位置づけを検討する必要がある。このことは，大人文化の中での子どもの異文化性，他者性の位置づけをみることによって，秩序（中心）に対する侵犯として問題とされる子どもの異文化性という見方そのものが，果たして妥当なものであるのかどうかという問いを解く手がかりを与えてくれる。さらに，子どもの異文化性という設定が大人というフィルターを通してみると，本田が設定する中心と周縁とは異なったように見える可能性を含んでいることについても示唆することができるかもしれない。

以上のことから，子どもを大人との関係の中に位置づけ，そこでどのように子どもが「異文化」視されているのか，また「異文化」視されるのであればそれはどのようなものなのかについての検討を要するといえる。このことによって，実際に「子ども」がどのようにして存在しているのかを

理解する一助となるであろう。この理解を深めるために，「子ども－大人」という関係性の視点，小浜（1987）の指摘する「関係としての子ども」[4]という視点を導入して，子どもを「異文化」視することを考えたい。

小浜は，「関係としての子ども」という視点の必要性を次のように説明する。子どもは生れ落ちた文明社会のただ中におかれ，他ととりかえのきかないコードを身体的に組織化すべく宿命づけられているのだから，「秩序から無視されているもの」や「文化の外なる存在」などではなく，大人との関係において秩序性の方向に強力に組み込まれている（小浜　1987：68－70）。

しかし，大人との関係において「子ども」が成り立つということは，大人が「文化の外なる存在」として子どもを位置づけた（位置づけなおした）上で，子どもと関係を結んでいると考えることもできる。ただし，「文化の外なる存在」として子どもが捉えられる場合，完全にその位置を占めた存在というよりも，大人によって規定される子どもの特性として位置づけられる。

つまり，大人との対関係として子どもが位置づけられたことによって，「子ども」が発見されると同時に「大人」が発見されることにもなった。「子ども」が「子どもらしいもの」と措定され，そうであることを当為とされたとき，大人たちも「大人らしく」生きることを要請され始めたのである（本田　1991）。「子ども－大人」という関係の中で，「子ども」としての地位を獲得し，関係維持のために，「大人」が「子ども」を位置づけなおすことが必要となる。「大人」の側に焦点を当てることで，「子ども－大人」という関係下において，子どもが「文化の外なる存在」としていかに位置づけられているのかをみることができるだろう。

このように，「子ども」が認識されるのは，「子どもを浮上させるようなもの」との関係（つまり大人との関係）を捨象したところで成り立つことはない。「子ども」という認識がなされるのは，根本において大人によるものとなる。小浜が指摘するように，大人という眼差しのもとで，個別具体的な関係（親子など）を結ぶ「関係としての子ども」であることを子どもが免れない以上，その点を考慮しなければならないのである。その第一段階として，子どもが大部分の生活を親という大人と過ごすということから考えて，「子どもを浮上させるようなもの」として親を取り上げ，子どもを関係性という位相に位置づける手がかりとしたい。

3．親役割の検討～大人による子どもの位置づけを把握するために～

(1) 親役割の位置づけ

親という役割は，子どもとの対関係によって成立するわけであるが，子どもとの対関係のみで規定される親を把握することは避けたい。その理由は，親は単に親役割のみを生きているのではなく，複数の役割のもとで生きていることによる。ただし，複数の中での親役割の位置づけは，親役割そのものの否定ではなく，親役割をどのように位置づけるかという問題を孕むことになる。そこで本章では，親自身が担っている複数の役割の中での親役割の位置づけではなく，親自身による親役割の相対的な位置づけという視点に注目し，親による子どもの規定について検討する。

まず，親による子どもの位置づけについて考えてみたい。子どもを持っている親は，必ずしも，

家庭だけに閉じこもり，密室の中で子どもとの関係を構築しているわけではない。拘束的・包括的な血縁・地縁・社縁のみを中心として必ずしも人間関係を構築しているわけではなく，選択的な人間関係を築き，地域活動にいそしむような「外さん」化しているのである[5]（上野　1994，上野・電通ネットワーク研究会　1988）。このように，人為的に相手を選びあう多元的な人間関係のありようを，上野は「選択縁」と名づけた。「選択縁」を構築することの意味は，過社会化された役割（血縁・地縁・社縁のような「有縁」において形成される役割，例えば，親・課長など）から離脱することができ，アイデンティティの創造やコントロールを可能にすることにある。ただし，上野が指摘する過社会化された役割からの離脱は，親であれば親以外のところに自分のアイデンティティを見出す形での「選択縁」の構築を意味している[6]。

しかし，子どもに対する関心の高さ[7]を考えると，親という役割そのものが否定されているわけではない。その一方で，子育ての負担感を大きいと感じる親が，負担感をさほど感じない親と同程度いる[8]ことから考えると，子どもとの関係を構築し，親役割を受容する過程において，選択縁が果たす役割が重要なものの一つとなるのではないかと思われる。

選択縁の構築と親役割との同一化の問題を考えることの意義は，次のことから理解することができる。子育てをしている親（特に小さい子どもを持っている親）にとっては，子どもから離れることが比較的困難であること，また，子どもと関わる時間を重視していることから，血縁・地縁・社縁と選択縁とが，機能的にクリアーに分離されるわけではない。そうすると，親という役割に対する意味づけ自体が，他の役割との関連において規定されるので，親役割を相対化するためには，親という役割をどのようにして取り込み，自己を見出しているのかを洗い出す作業が必要となってくるのである。そこで，選択縁を取り込むことで，血縁としての親子関係から距離をとり，他者との相互作用の中で，親役割を見出すこととなる。このように，選択縁を取り込み，血縁としての子どもとの関係から距離をとることは，新たに自分の理想とする子どもとの関係の構築を意味するものでもある。

以上のことから，「選択縁」という関係を結ぶことによって遂行される親役割を次のように考える。「選択縁」を構築することによる親役割からの離脱は，過社会化された役割からの離脱を意味するものであるが，その役割から完全に離脱するものではない。「選択縁」という関係を構築することは，親役割からの一定の距離をとるための条件を整え，親役割に「適切に」関与し，親役割を遂行するための手段だと考える。そのもとで，親役割において自己のアイデンティティを確立し，親役割との同一化を図ることができるのである。そこで問題となってくるのが，選択縁を構築する際に，選択縁内部での他者との相互作用において，いかに役割が規定され，役割との同一化が可能となるのかということである。本稿における問題関心は，家庭内で規定される親役割の検討ではなく，相互作用において規定される，状況によって規定される親役割である。

(2) 親役割の検討～ドライツェルの役割論から～

では，他者と相互作用を行うという状況において，規定される親役割をどのように考えたらよいのであろうか。この問題を考えるにあたって，ドライツェルの役割論に基づいて話を進めたい。

ドライツェルは，相互行為脈絡での「状況的役割」に注目し，その状況下で行為者が主体性を発揮することによって，役割が「有意味的統合」となると考えた。つまり，社会的存在・抽象的存在としての役割は，相互行為という状況に準拠することで，「有意味的統合」をもった役割として具現化するのである。「有意味的統合」としての役割の意義とは，期待レベルでも行動レベルでも，行為者の欲求充足あるいは価値の実現，そしてこのことを前提とした行動様式の統合（深澤　1983）にある。この行為が役割の構成条件となるには，社会的行為，すなわち相互作用状況を考慮する必要がある。つまり，役割を通じて主体的営為を発揮することで，価値の実現を図ることができるのである。

相互行為連関に主体的営為を取り入れ，そのうえで役割との同一化を考えたことにドライツェルの意義はある。このことによって，役割と個人とが断絶するような二元論を相対化することができた。ドライツェルは，役割を捉えるに当たって，社会ではなく個人に焦点を当てたのであるが，その際，個人を過度に強調しすぎることによって生じる「過度に主体的な人間」という問題を，相互行為における規範的性格を考えることで解消した。

以上のように，ドライツェルにおける役割は，主体的営為，社会的相互作用，規範的性格という３つの特徴を有することによって成立するのである。では，規範的性格をもった相互行為という状況の中で，個人と役割との関係からいかに役割が「有意味的統合」となるのか，という点について考えていきたい。

そのためには，相互行為を成立させる規範とは，いかなるものかをまず検討する必要がある。この点を明らかにするために，ドライツェルは，社会的規範の中での主体性の発揮を社会的規範の特徴から分類し，先の役割の３つの特徴，主体的営為，社会的相互作用，規範的性格を関連させた。その上で役割への「適切な」関与の方法を相対化して捉え，「有意味的統合」としての役割の遂行を考えたのである。

社会的規範を相対化するためにドライツェルは次の方法をとる。行動の方向づけにおける社会的拘束力を問題とし，その多様性を統一的に捉えるために，1) 社会的規範が所与としてどのように与えられているか，2) 社会的規範はどの範囲で妥当であるか，という２つの視角からのアプローチを試みる（水野　1978a）。

まず，社会的規範の所与について，主体的営為が社会的規範にいかに組み込まれているのか，その度合いに注目し規範の特性を３つに分類する。

「既定の役割執行のための規範」

役割の担い手自身の主体的営為よりも，厳格な規則への服従が役割の規範として尊ばれる。

「役割課題達成のための規範」

主体的営為は要求されるが，その要求はある特定の課題の遂行にとって必要とされる限りにおいてであり，主体的営為と遂行の規則とが均衡を保っている。

「役割の個性的形成のための規範」

役割の担い手自身の価値志向が前面に出た形での主体的営為が要求される。

（水野　1978a：68）

次に，社会的規範がどの範囲で妥当となるのかを，役割の同一化の度合いという問題から分類したものをみたい。

「支配的諸規範」

集団や組織が制度的に堅固な地位構造を持ち，支配諸関係が形作られたもので，「組織に関係づけられた役割群」と呼ばれる。

「相互行為の諸規範」

特定の状況と結びついており，その状況を離れては，役割行為者に何も要求することはない。したがって，状況内においてのみ存在するもので，「状況に関係づけられた役割群」と呼ばれる。

「文化的諸規範」

文化的諸規範の本質部分は，社会化過程において内面化されてしまっている。それらは，ある特定の人間集団と関連しており，その集団を他の集団と取り替えることは，文化的諸規範の大部分が本人自身の『超自我』の構成契機であるがゆえに，苦痛を伴わないでは不可能である。たとえば，ドイツ人やフランス人が移民として異国へやってきたとしても，祖国や母語を捨てさるということはむずかしい。『生まれつき』ということは小さい時分からの教育やしつけを通じて，ドイツ人もしくはフランス人なのだから。この種の規範に由来する役割を「人間に関係づけられた役割群」と呼ぶ。

（水野　1978a：70－71）

このように，ドライツェルは主体的営為の度合いと，役割の同一化という二つの軸に注目し，両者をクロスさせ，社会的役割の分類図式を提示する（表1参照）。この分類図式において，ドライツェルは親役割を，援助を期待される役割として分類する。子どもから援助を期待され，その課題を遂行するために主体的営為を発揮するものとドライツェルは捉えている。しかし，この点だけを取り上げ，親役割を分類することに問題はないのであろうか。

確かに，ドライツェルが主張するような親役割の遂行はあるだろうが，その時の役割は，家族内部での親と子どもという非常に限定されたものとなってしまう。本章のはじめで述べたように，われわれの関心は，狭義的な意味において規定される親と子どもにあるのではなく，親同士が相互作用を行うことで，いかに親役割に意味づけをし，親としての価値の実現をしているのかにある。ドライツェルの分類図式からいうと，主体的営為の度合いという軸において，「役割の個性的形成のための規範」という点から，また，役割の同一化という軸において，「相互行為の諸規範」という点からも，親役割を考察する必要があるように思われる。ただし，ここで「相互行為の諸規範」として親役割を理解することは，親役割の「文化的諸規範」そのものを否定するものではない。「文化的諸規範」という特徴をもつ親役割が，単に固定されたものとして遂行されているとは考えにくい。だからこそ，親役割の解釈に幅を持たせるために，「相互行為の諸規範」という点を考慮する必要があ

表1　社会的役割の分類図式（H・P・ドライツェル）

強　←　同一化の度合　→　弱

規範の特性 ＼ 規範の由来	文化的諸規範（人間に関係づけられた役割群）	支配的諸規範（組織に関係づけられた役割群）	相互行為の諸規範（状況に関係づけられた役割群）
規定の役割執行のための規範（規則への服従）	社会化される際の役割（子供・患者）	規律・服従を強要される役割（兵士・囚人）	規則の遵守を要求される役割（フットボール選手・取引関係者）
役割課題達成のための役割規範（課題の成就）	援助を期待される役割（両親・司牧者）	労働を期待される役割（郵便局員・労働者・団体長）	最大限努力を期待される役割（受験者・討論会のリーダー）
役割の個性的形成のための規範（価値実現のスタイル）	関わりを求められる役割（夫・恋人・カリスマ的指導者）	力量を求められる役割（政治家・役者・学者）	交際を求められる役割（ゲスト・隣人）

弱↑主体的営為の度合↓強

（出所，gLLG，s.140，水野　1978a：72）

るのである。役割の解釈に幅を持たせるには，先ほど指摘した主体的営為の度合いにおける「役割の個性的形成のための規範」という側面の必要性のみならず，ドライツェルが主張する「役割課題達成のための規範」という面に注目することも必要となってくるだろう。

ただし，ここでの目的は，ドライツェルの分類図式のどこかに新たに親を当てはめ直し，分類することではない。ドライツェルのように，狭義的に親と子どもの関係を捉えるのではなく，相互行為という観点を前面に押し出して親がいかにして役割と同一化し遂行するのか，そしてそのもとで子どもがいかに規定されるのかを把握することにある。ドライツェルの分類図式の問題性について指摘したのは，ドライツェルの主体の側面を押し出した役割論の有効性は認めるものの，具体的な役割（親役割）を分類することには疑問の余地があるので，ドライツェルの分類図式にあるように狭義的に親役割を捉えないことを明示しておくためである。よって以下では，親役割が多様な条件によって規定される広義的なものであるということを踏まえたうえで，ドライツェルの役割論における相互行為における規定という面に注目して，多様な場における親という役割を検討したい。

相互行為における親役割の遂行には，主体性と規範とがどのようにして表出するのかを考えることが必要である。この両者のバランスを保ち，役割の遂行が可能となるのはどのような条件の時であろうか。問題となるのは，役割との関わり方である。具体的には，親同士の間で遂行される親役割と，子どもと親との関係によって遂行される親役割を考えるに当たり，どのようにして主体性は発揮されるのか，また，どのようにして規範の組込みがされているのかを検討することが必要なのである。このことを検討することで，いかにして役割が「有意味的統合」となっているのかを知ることができる。主体性を発揮することは，役割そのものからの離脱を意味しない。また，役割を遂行するうえでの規範は，役割そのものに完全に同一化することではない。以上のことから，役割が「有意味的統合」をもったものとなるには，役割との「距離」と「関与」とのバランスを計らなければならない（深澤　1983）といえる。つまり，役割に関与するには，役割に対する距離，役割距離

(role-distance) が必要なのである。

役割距離（role-distance）は，ゴッフマンによって提起された概念である。役割距離とは，「個人とその個人が担っていると想定される役割との間の効果的に表現される鋭い乖離」であり，ここでは，「個人は，実際に，その役割を拒否しているのではなく，すべてを受け入れるパフォマーにとって，その役割のなかに当然含まれていると見なされる虚構の自己を否定しているのである」(Goffman 1961＝1985：115)。虚構の自己とは，日常的な出来事に参加することによって発生したその人のイメージであり，状況を操作することで，自分のイメージから身を引こうとするものである (Goffman 1961＝1985)。ゴッフマンの役割距離（role-distance）は，期待される役割を表面的に否定することで，役割を受容するものであるが，ここで考える役割に対する距離とは，ゴッフマンのそれとは異なる。役割距離は，役割に対して「適切に」関与するために，役割から距離をとるのである。つまり，役割を表面的な形にしろ否定するのではなく，役割を相対的に位置づけるための前提条件として役割距離は必要なのである。そうすることで，役割を遂行することができるのである。

役割距離による役割の相対化，そして主体的営為を可能とする「適切な」役割の関与を考えることの妥当性は次の理由による。まず，役割の行為者自身がいかなる行為をすればいいのか，つまり相互作用という状況を成立させるための条件が必要である。相互作用において，親という役割の遂行を実現するために，行動の方向づけが妥当性・正当性をもつものとして，互いに確認される必要がある。つまり，親役割に対する期待が相互作用を行う上で求められる。ある集団・グループに属することによって，そこで求められる役割期待が，自分自身が望んでいるものとかけ離れていればいるほど，現状の役割と理想の役割との間で葛藤が起き，役割が不安定なものとなる。いわば，社会的アンビバレンツの状態に陥る。このような役割の不安定な状態を解消するために，帰属するグループにおいて求められる役割期待が，自分にとって受け入れられるものでなければならない。そこで，まず自分の属するグループを自分で選ぶ作業を行わなければならない。つまり「選択縁」としての関係を築く，その動機づけの段階において，役割距離は意識されているのである。

だからこそ，実際に「選択縁」という人間関係が構築され，アンビバレンツな状態を避けるのである。では，この選択縁という人間関係において，役割との同一化を図るために，役割距離の働きはどのような形でなされ，主体的営為を含んだ役割の「適切な」関与がされるのであろうか。

このことは，選択縁というグループに所属するために求められる規範について考えることによって，解決の端緒をみつけることができる。所属するグループで求められる役割に対する規範は，グループに所属したいと思う当事者が思い描く役割と一致したものとなる。その規範が選択縁を成立させるためには，過度に親であることを意識させるものとして提示されるのではなく，個人の能動性が発揮できる余地が残されていることが必要である。そのためには，親のみならず，子ども自身が能動的に行動できるという点が考慮されることも必要であろう。親同士だけで規定される，狭い範囲での規範を覆うような，グループのもつ広い意味での規範が役に立つのである。そこでの規範が親という役割との距離を保つことが可能となるようなものであれば，親にとって親役割の相対化，また親と子どもとの関係の位置づけの相対化が可能となり，親役割との同一化も可能となるであろう。

4. むすび

本稿では，「子ども - 大人」という関係性の位相に子どもを位置づけるために，大人による子どもの規定について考察をした。関係性という俎上に子どもをのせるためには，まず対象となる大人の具象性について検討をする必要が生じる。具象度をあげた大人が子どもとの関係を構築する上で，いかに役割を遂行するのかを対子どもとの関係のみに囚われるのではなく，「大人 - 子ども」という関係を成立させるような状況下に子ども・大人を布置する必要がある。今回取り上げた親であれば，親役割を「適切に」遂行する上での役割の「関与」と「距離」についての条件を，それぞれ異なる状況下にある親たちについて検討することで，子どもとの位置を明らかにし，子どもとの関わりについて知ることができるのではないかと思われる。そこで解明される子どもと大人の関係において，子どもを他者と位置づけることは，それぞれの役割を遂行する上での「距離」と「関与」を考えるうえで有効な手段となるであろう。本稿での試論を基に，具体的な役割を持った大人と子どもの関係を考察し，大人と子どもの関係を解明することが今後の課題だといえるだろう。

（いわかわ・こうじ　社会福祉学科）

注

(1)小浜逸郎（1987）の命名によるものである。

(2)この場合，「子ども」と「大人」とが対をなす概念であることが前提となっている。

(3)本田は，「子どもの世界」なるものが大人の世界・文化とは無縁ではないのだから，子どもに「固有の文化」を措定すること自体不可能ではないかという批判に対して，この論をつきつめていくと「大人」「子ども」という対極的な分類は消滅せざるをえまいと指摘する。そして，人間が関係的存在以外の何ものでもないことを認めた上で，「子ども」「大人」を相対的に独立させ，それぞれに固有の特性を認めたうえで，「大人」から「子ども」へ，あるいは「子ども」から「大人」へ手渡される諸影響を考えるために「子どもの世界」を独立したものとして捉える。

(4)「関係としての子ども」は，小浜（1987）の分類における歴史的・記号論的方法に対応する。

(5)ただし，都市部においては，身近に親族がいることが少ない場合が多い。その結果，親族以外の選択縁に基づいた関係を構築せざるをえないともいえる。

(6)保育園・幼稚園で形成される保育縁や幼稚縁は，選択縁とは別のカテゴリーに属するものとして分類される（上野・電通ネットワーク研究会　1988)。

(7)『子供と家族に関する国際比較調査報告』（1996）によると，「子育ては楽しみや生きがいである」という意見を肯定した人の割合が８割強いた。

(8)『子供と家族に関する国際比較調査報告』（1996）による。

参考文献

Aires Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime,* Plon（＝杉山光信・杉山恵美子訳,

1980,『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活―』みすず書房）

Cohen Stanley and Taylor Laurie, 1976, *Escape Attempts: The Theory and Practice of Resistance to Everyday Life,* Allen Lane.（＝石黒毅訳，1984,『離脱の試み―日常生活への抵抗―』法政大学出版局，特に２章「定常的行動の心的操作」pp. 30－56参照）

Dreitzel, H. P., 1975, "Social Roles and Political Emancipation", *International Journal of Sociology, vol. 5, No. 1* pp. 117-145.

深澤建次，1983,「役割と行為―H. P. ドライツェルの役割概念を中心に―」『東京農業大学一般教育学術集報』14　pp. 48－57.

――――，1986,「演劇論的役割論の構造―E. ゴフマンとH. P. ドライツェル―」『東京農業大学一般教育学術集報』16　pp. 55－67.

Goffman Erving, 1961, Encounters; *Two Studies in the Sociology of Interaction.* The Bobbs-Merrill Company.（＝佐藤毅・折橋徹彦訳，1985,『出会い―相互行為の社会学―』誠信書房）

橋本和幸，1985,「社会的役割」,『社会的役割と社会の理論』恒星社厚生閣　pp. 147－168.

本田和子，1980,『子どもたちのいる宇宙』三省堂.

――――，1982,『異文化としての子ども』紀伊国屋書店.

――――，1986,「『子ども論』の多層性」，小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人編『新しい子ども学３　子どもとは』海鳴社　pp. 484－496.

――――，1989,『フィクションとしての子ども』新曜社.

――――，1991,「〈原史〉としての子ども」，市川浩他編『現代哲学の冒険②　子ども』岩波書店　pp. 241－316.

――――，2000,『子ども100年のエポッグ―「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで―』フレーベル館.

柄谷行人，1980,「児童の発見」『日本近代文学の起源』講談社　pp. 153－188.

北本正章，1988,「子ども」，見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂　pp. 309－310.

小浜逸郎，1987,『方法としての子ども』大和書房.

水野節夫，1978 a，「H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(上)」，法政大学社会学部学会『社会労働研究』第24巻第１・２号　pp. 49-78.

――――，1978 b，「H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(下)」，法政大学社会学部学会『社会労働研究』第24巻第４号　pp. 49－84.

森楙，1998,「子ども研究の動向と課題」，日本教育社会学会編『教育社会学研究』東洋館出版社　pp. 76－96.

村瀬学，1984,『子ども体験』大和書房.

佐藤勉，1981,「役割理論」，安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編『基礎社会学　第３巻　社会過程』東洋経済新報社　pp. 84－102.

総務庁青少年対策本部編，1996,『子供と家族に関する国際比較調査 報告書』大蔵省印刷局.

上野千鶴子・電通ネットワーク研究会，1988,『「女縁」が世の中を変える』日本経済新聞社.

————, 1994,「女縁の可能性」,『近代家族の成立と終焉』岩波書店　pp. 281－302.
山口昌男, 1975,『文化と両義性』岩波書店.
————, 1977,『知の祝祭　文化における中心と周縁』青土社.
————他, 1984,『挑発する子どもたち』駸々堂.
山村賢明・北澤毅, 1992,「子ども・青年研究の展開」, 日本教育社会学会編『教育社会学研究』東洋館出版社　pp. 30－48.

The child as the relationship
— from the viewpoint of the role of parent —

Koji Iwakawa

The discovery of the "childhood" by Aries, P. revealed that the child does not exist objectively but is given its meaning subjectively by the "adult-child" relationship. That is, the "child" has been found by adults as "the other." The purpose of this paper is to examine the "adult-child" relationship mainly from the viewpoint of the role of parent, and to investigate the relative position of the child looked by adults as "the other."

First, I direct my attention to the viewpoint of "cross-culture" of Honda, M., which outlines the subjective image of the child. Then, I rearrange this subjective image of the child within the "adult-child" relationship. As an example I deal with the parents in particular, and try to settle the relative positon of the role of parent, employing both the role theory of Dreitzel, H. P. and the concept of "role-distance" of Goffman, E. As a result, I examine how the "child" is determined by such relative positioning of the role of parent.

It will be useful to consider such relationships between adults and children taking concrete roles, when we wish to understand the position of the child within the "adult-child" relationship.

Keywords: the "adult-child" relationship, cross-culture, the role of parent, role-distance